



学校だより

<http://www.sumida.ed.jp/ryogokusho/>

令和7年9月30日

墨田区立両国小学校

墨田区両国4-26-6

TEL 3634-7876



ルドルフとイッパイアッテナ

校長 山崎 隆

今年の夏は統計データ上で史上最も暑い夏になりました。東京都の広報誌には「今年の夏は沸とう京」という言葉が使われて、熱中症への警戒が呼びかけられていました。9月に入っても暑さはかわらず、報道等では日本から「秋」が無くなってしまうのではないかと心配する声も聞こえてきました。

一方、10月は月末から翌月にかけて「読書週間」が設けられるなど「読書の秋」というフレーズも使われています。どうして秋だけが読書と特別に結びついているのだろうかと思いついたので調べてみました。

「読書の秋」の起源は、唐（現在の中国）の文学者である韓愈（かんゆ）が息子に贈った詩の一節とされています。それは、学問の大切さを説いたもので、秋になって涼しくなったら「燈火稍可親」（夜の灯りに親しんで書物を開きなさい）というものです。これが後に「灯火親しむべし」という漢語となり、一般に用いられるようになったのだそうです。また、明治時代には、文豪・夏目漱石が新聞に連載していた「三四郎」に引用し、読書といえば秋のイメージが広く使われるようになったと言われています。

前置きが長くなりましたが、今回は読書にちなんだお話です。題名の「ルドルフとイッパイアッテナ」は私が教師になりたての頃に子供たちに読み聞かせたり一緒に読んだりして心をぐっとつかまれた児童文学作品です。作者は斉藤洋さんです。ストーリーは次のようなものです。

岐阜県に住む飼い猫のルドルフはふとしたことから東京に来て迷子になってしまい、トラ模様の大きくて強そうな野良猫に出会います。その野良猫は、近所のおばあさんには「トラ」、魚屋のおじさんには「デカ」、学校の給食室では「ボス」と呼ばれています。ルドルフに名前を尋ねられ、「おれの名前は、いっぱいあってな・・・」と答えたことで2匹はお互いを「ルドルフ」「イッパイアッテナ」と呼び合うことになります。イッパイアッテナは文字が読めて教養があり、ルドルフに野良猫としての生き方を教えます。また、ルドルフはイッパイアッテナの力を借りて飼い主の家へ帰る方法を探しますが、苦勞しながらもなかなかよい方法が見つかりません。とうとう泣きべそをかいて弱音を吐いてしまいます。そこでイッパイアッテナはルドルフを励ますために「絶望は愚か者の答えだ。」と言います。

このセリフが印象的で、「希望を捨てず最後まであきらめない」という意味で「絶望は愚か者の答え」が当時の私の学級の合い言葉になりました。

本は心の栄養とも言われますが、読書から得るものや学ぶものはたくさんあります。学校生活に限らず、子供たちが成長する過程においては様々な場面で困難なことや乗り越えなければならない壁に出会います。そんなとき最後まであきらめない強い気持ちをもつことの大切さをこの本は教えてくれます。

読書の秋です。子供たちが読んだ本や、保護者の皆さんが子供の頃に読んだ本を話題にして親子で本の世界を楽しんでみてはいかがでしょうか。